

# 保育者養成における能動的音楽療法の実践

Practice of the Active Music Therapy in Child-care worker Training

澤 田 悦 子

Etsuko SAWADA

## I はじめに

こども学科は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を養成する機関であり、「こどもを取り巻く環境や社会的な課題に関する洞察力を養い、教育・保育等に関わるすぐれた実力を有する人材を育成する」教育理念のもと、「こどもの保育や教育及びこどもに関する諸問題に適切に対処できる技術や実力を身につけた人間性豊かな人材の育成」を教育目標としている<sup>1)</sup>。その中で音楽・美術・体育の指導力は、教育者・保育者に身につけてもらいたい素養である。音楽は現場で活用できる技能や実践のための表現方法があり、計画立案、評価について工夫する力を向上させていくことが重要と考えられる<sup>2)</sup>。

音楽療法は、2013年度入学生の保育士養成課程選択必修科目として2年生に設定されている。前期の音楽療法概論の系列は保育の対象の理解に関する科目であり、音楽療法が対象者の目的や状況に音楽を活用する為、対象者の理解を深めながら概要と基礎的知識を習得し、さらに音楽の機能と作用や活用方法を学ぶ。後期の音楽療法演習の系列は保育の内容・方法に関する科目であり、概論で学んだ基礎知識や理論を生かし、音楽活用の方法を理解し、計画の実際を演習する事である。

## II 研究内容と目的

音楽療法とは、「音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを、心身の障がいの回復、機能の維持改善、生活の質の向上に向けて、意図的、計画的に活用して行われる治療技法である。」と松井紀和は定義している。実践者である音楽療法士が音楽の持っている心理的、生理的、社会的機能を用いて、対象者の行動（あるいは態度、構え）の変化を促す事として行う、治療、リハビリテーション活動、保健活動、教育的活動等を総括的に現している<sup>3)</sup>。対象領域は乳幼児から高齢者まで、生老病死のあらゆる状態にある人々に実践する。対象者の要望や活動の目的により音楽の活用が決定され、その実践は、音と感情、行動に関する経験を探求することである。対象者を幼児とした時では、実践者と幼児との間に行われる音楽の循環と創造的表現の進展である。保育で求められている豊かな感性、表現力、創造力を養う活動のために保育者の

学びとして、音楽療法の学びとその実践が果たす役割は大きいものとする。本研究は、能動的音楽療法実践を通して、保育者養成における音楽療法の意義と課題の検討を目的とした。

### Ⅲ 研究の方法

#### 1. 対象

音楽療法概論、音楽療法演習を履修している2年目の学生85名を対象とした。

#### 2. 活動目標

音楽療法は、受動的音楽療法と能動的音楽療法があり、受動的音楽療法は、対象者が音楽の鑑賞を主として行う活動である。本研究で実施した能動的音楽療法は、対象者による音楽の演奏や表現活動である。活動目標は次の通りである。①子どもの成長や発達を考慮し人間関係や社会性を促す活動を行う。②学生の実践的な学びの場とする。③子ども達が音楽を通して動く、楽器の音、歌などの音楽表現を楽しむ。④大学の機能を活用した活動の場とする。

#### 3. 実施期間

活動の実施期間は、2014年5月から11月までとし、全4回実践した。

#### 4. 内容・方法

2年目の学生は幼稚園および保育園、施設実習が設定されているため、5月から7月までに2グループ（第1グループの学生26名、第2グループの学生27名）、10月から11月までに2グループ（第3グループの学生18名、第4グループの学生14名）の全4グループに分かれ本学の保育実技室で実施した。対象児0歳3名（女児2名、男児1名）、1歳9名（女児7名・男児2名）、2歳児12名（女児8名・男児3名）健常児の成長、発達についてアセスメントを行い各グループの実践者のまとめ役（以下リーダーとする）を中心に全員で役割と実践プログラムを計画する（表1）。活動概要で能動的音楽療法は20分間の実践である（表1）。保育実技室は土足禁止であるが、園児の活動は裸足となる為、安全面と衛生面を考慮し8時15分から常設されている机、椅子を収納し床の水拭きとモップで清掃を行い、自由遊びの場を設定する（図1）。園児は保育士の引率で園から徒歩、避難車2台で10時に来学し一旦、構内グラウンド横の芝生で水分補給など休憩を取り、新しい環境に慣れる。10時20分から担当の学生と教員で園児を迎えに行き、保育士をサポートしながら子ども達を教室まで誘導する。避難車は、教室入り口近くに停車して帰りの際、速やかに利用できるよう配慮した。実技室入り口で靴下を脱ぎ、靴の中に入れ入室する園児をサポートする。10時30分からの自由遊び（絵本、ままごと、滑り台、サークル、乳母車・人形、カラーブロック、お絵かき等）では安心感、信頼関係の構築を考慮して触れ合うことやコミュニケーションを促す。10時40分から能動的音楽療法活動を20分間実践する（表2、表3、表4、表5）。11時に活動を終了して園児のお帰りの支度をサポートする。11時10分から教室内の現状復帰を担当グループの学生全員で行う。実践後は、アンケート記入と学生間での意見交換により振り返りと課題を検討する。

各グループで担当する人数に違いが生じたが、学生が協働して実践できるよう全員の役割・

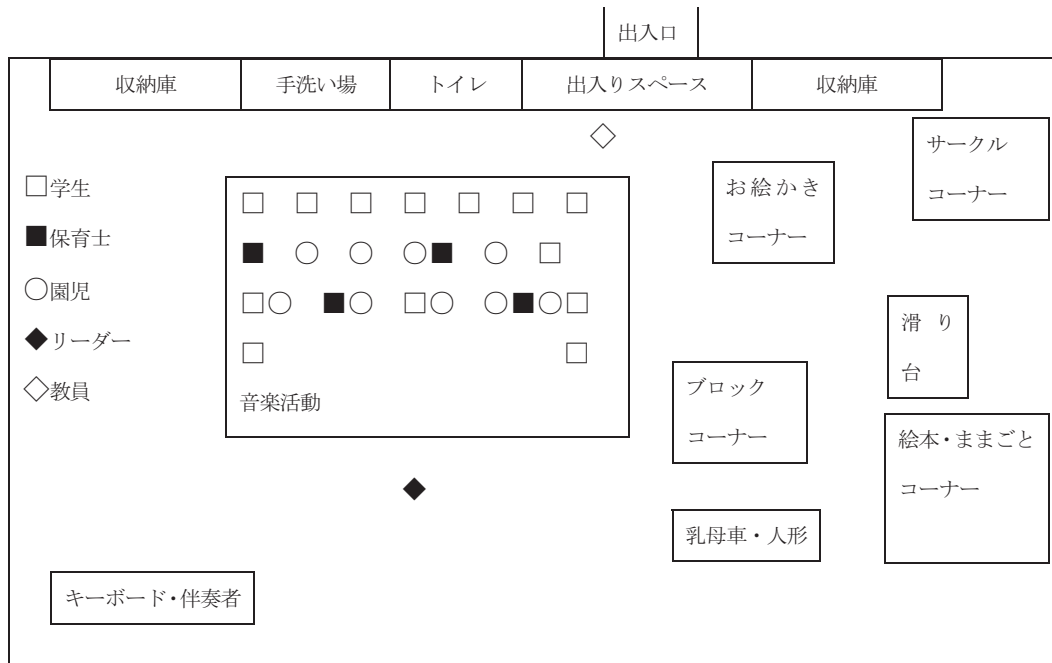


図1 保育実技室での活動環境

担当に配慮した。実践前は、環境設定、園児のお迎えと誘導、各自由遊びのコーナーで園児と遊ぶ。実践終了後は見送り、清掃、現状復帰である。

表1 活動とタイムスケジュール

時間	内容	役割・担当
8:15~8:45	環境設定を行う。清掃を行い、自由遊びの場を設定する。	環境設定
10:00~10:20	グラウンド横の芝生で園児が休憩する。	園児お迎えと誘導
10:20~10:30	園児のお迎え。学内へ誘導し保育実技室に入室する。	
10:30~10:40	ふれ合いタイムとして自由遊びを行う。	自由遊び
10:40~11:00	能動的活動。	実践
11:00~11:10	帰り支度。学生の見送り担当が学内玄関まで付き添い、支援する。	見送り
11:10~11:25	保育実技室の清掃、現状復帰を担当全員で行う。	環境現状復帰

能動的音楽療法は、学生が計画し、実施した。実践の進行プログラムは参加者、項目と時間、曲名、目的、内容を示した(表2, 表3, 表4, 表5)。役割は、グループのリーダーを1名から2名とした。リーダー以外は補助者としてリーダーの補助および園児の活動を支援する。他にキーボードの伴奏者、活動に必要な教材製作、活動の実践を全員で担当する。

表2 能動的音楽療法1回目(2014年5月8日)

参加者：保育園児2歳児12名，保育士4名（園長1名），学生26名，教員1名			
項目	曲名	目的	活動内容
導入・開始 10:40~10:42	はじまるよ（澤田悦子作詞・作曲）	始まりの意識付け	歌唱・手拍子 伴奏
身体表現・バス	バスごっこ	音楽を通して動く，コミュ	バス遊びで，色の国へ行く，

10:42~10:50	バスにのって	ニケーションを促す	コミュニケーションを促す 伴奏
歌唱・色の国 10:50~10:57	どんな色がすき	色を音楽で楽しむ	ペープサートと布を使用する 歌唱しながら色を確認する 伴奏
歌唱・終了 10:57~11:00	あしたも元気で	終わりの意識付け、次回の期待	園児を囲むようにしながら歌唱 伴奏



写真1 全体の自由遊び



写真2 ブロック（手前）とお絵かき

表3 能動的音楽療法2回目（2014年7月10日）

参加者：保育園児0歳児3名，1歳児9名，2歳児12名，保育士4名（園長1名），学生27名，教員1名			
項目	曲名	目的	活動内容
導入・開始 10:40~10:42	はじまるよ（澤田悦子作詞・作曲）	始まりの意識付け	歌唱・手拍子 中央に移動して全員で開始 伴奏
身体表現・汽車 10:42~10:45	走るよ汽車ぼっぼ	音楽を通して動く，コミュニケーションを促す	園児と一緒に体を動かす 伴奏
楽器表現・音の国 10:45~10:50	どんな音がするのかな	音を聞く，音源を確認する	（澤田悦子作詞・作曲）鈴，カスタネット，タンブリンを鳴らす 伴奏
歌唱・楽器 10:50~10:57	おもちゃのチャチャチャ	楽器でコミュニケーションを促す	鈴，カスタネット，タンブリンの楽器を鳴らす，歌唱 伴奏
歌唱・終了 10:57~11:00	あしたも元気で	終わりの意識付け，次回の期待	園児を囲むようにしながら歌唱 伴奏



写真3 簡易楽器の音あそび



写真4 簡易楽器の演奏と歌唱活動

表4 能動的音楽療法3回目(2014年10月9日)

参加者：保育園児0歳児3名，1歳児9名，2歳児12名，保育士4名(園長1名)，学生18名，教員1名			
項目	曲名	目的	活動内容
導入・開始 10:40~10:42	はじまるよ(澤田悦子作詞・作曲)	始まりの意識付け	歌唱・手拍子 伴奏
身体表現・汽車 10:42~10:45	走るよ汽車ぼっぼ	音楽を通して動く，コミュニケーションを促す	輪になり足踏み，手で汽車の動きを表現する 汽笛の工夫 伴奏
身体表現・歌唱 10:45~10:50	アブラハムの子	新しい曲をうたう	歌唱と身体表現を楽しむ 伴奏
身体表現・ダンスの国 10:50~10:57	アブラハムの子 ダンス	音楽を通して動く，コミュニケーションを促す 活動の集中	7番まで通す こどもの様子をみて2回繰り返す 伴奏
歌唱・終了 10:57~11:00	あしたも元気で	終わりの意識付け，次回の期待	園児を囲むようにしながら歌唱 伴奏



写真5 導入の手遊びと歌



写真6 身体活動

表5 能動的音楽療法4回目(2014年11月20日)

参加者：保育園児2歳児12名，保育士4名(園長1名)，学生14名，教員1名			
項目	曲名	目的	活動内容
導入・開始 10:40~10:42	はじまるよ(澤田悦子作詞・作曲)	始まりの意識付け	歌唱・手拍子 伴奏
身体表現・バス 10:42~10:47	バスにのって	コミュニケーションを促す	子どもを膝の上に乗せて活動，全員で活動，チケット作成 伴奏
身体表現・音の国 10:47~10:53	アイアイ	歌唱・身体表現を促す	学生がさるの面で登場し，歌唱と身体活動を行う 伴奏
歌唱・楽器 10:53~10:57	こぶたぬきつねこ カレーライスのうた	手遊びの模倣 身体活動を促す	歌唱と手遊び，こども達で表現を行う 伴奏
歌唱・終了 10:57~11:00	さようならグッバイ	終わりの意識付け，次回の期待	園児を囲むようにしながら歌唱し終わりの意識付け，お帰りの準備 伴奏





写真7 身体活動



写真8 園児の身体表現

#### IV 実践振り返りのまとめ

能動的音楽療法の、全4回実施した。各グループの実践は1回ずつであるが、担当グループ以外の実践時に活動を見学することができる。実践後は、①自由記述のアンケートと学生間での意見交換を行い、グループごとで7項目（1. 学生から見た子どもの状況 2. 学生が感じた保育士の動きやサポート 3. 工夫したこと 4. 環境 5. 活動 6. 学び 7. 課題（対応）、課題（プログラム））にまとめた（表6、表7、表8、表9）。②グループ全体では2項目（8. 保育での音楽活動 9. 音楽療法での音楽活動）の振り返り内容をまとめた（表10）。

表6 第1グループのまとめ

1	<u>学生から見た子どもの状況</u> ：学生数が多く、威圧感を与えてしまった。人見知りで泣き出す子どもが多く見られた。 保育者に信頼感をもっており新たな環境では、子どもが保育者から離れなかった。
3	<u>工夫した事</u> ：保育者から子どもの名前を伺い、名前を呼び対応した。音楽と関連する切符と切符入れを作成した。
4	<u>環境</u> ：子ども達が安心して活動できる環境は、学生の対応も含まれている。自由遊びの設置は、一箇所にまとめない。
5	<u>活動</u> ：リーダーの活動に対する臨機応変さは凄と思った。練習、リハーサル通りにできなかったが、皆で頑張った。
6	<u>学び</u> ：子どもの成長や発達について学んでいたが、音楽活動を行い体験から理解できることが多くあった。
7	<u>課題・対応</u> ：上手にコミュニケーションをとり、子どもを安心させたかった。積極的に関わる事ができなかった。子どもの名前を呼んであげたいが、判らない。遊具を持ち遊ぶ子どももいる為、一人一人に合う対応が必要と感じた。 <u>課題・プログラム</u> ：準備が必要である。学生の声量が大きすぎた。年齢だけでなく月齢で対応する事が大事である。

表7 第2グループのまとめ

1	<u>学生から見た子どもの状況</u> ：遊びのコーナーをまとめた事で積極的に遊ぶ。笑顔で明るく対応することが不安感を軽減する。若干人見知りもあるが、遊びに自立心も見られた。学生が多く、戸惑う様子やぶつかってしまう事もあるが、一緒に遊ぶ。入室の際、緊張感や戸惑いが少なくなり、靴下を脱ぎ靴の中に入れる、手洗いの流れを覚えていた。
2	<u>学生が感じた保育者の動きやサポート</u> ：子どもの誘導の際、車道側を保育者が歩いた。子ども達

	が学生に関わりやすいよう声がけがあり、子ども達は落ち着いて遊んでいた。次の活動を予測して動き、子どもへの声がけや帰り支度の対応など迅速、的確である。子どもを見守り一緒に活動し、更に楽しめるように援助する。「いつもは人見知りで泣くが今日は泣かない」と普段の子ども様子を教えて頂く。対応に消極的になっていた時、声掛け頂き対応できた。
3	<u>工夫したところ</u> ：自由遊びは笑顔でふれ合いやコミュニケーションを取る。音を楽しみ演奏しやすい楽器を選択した。
4	<u>環境</u> ：遊びのコーナーを左側に配置する事やブロックコーナーを広くとり安全・安心に配慮した環境となった。
5	<u>活動</u> ：園児は手拍子や楽器、歌唱を笑顔で集中して楽しみ、学生の模倣ができた。プログラムは円滑に進行した。
6	<u>学び</u> ：お描きで学生が書き始める事で模倣し書き始めた。自由遊びのコミュニケーションは活動を円滑にした。
7	<u>課題・対応</u> ：声がけ、関わりができなかった。子ども達から遊びたいと思うよう、工夫した環境作りが大切である。ごみやピン止めが落ちていても気づく者がいなかった。遅刻し役割（お迎え）ができなかった。準備や動きを把握し、積極的な関わりが大事。褒める、相手の反応を待つことが大事。役割や活動が人任せにならず積極的な関わりを意識する。 <u>課題・プログラム</u> ：学生同士の動きを把握し、先を予測して活動する。伴奏で教員から汽車の音の工夫の指導がある。子どもが集合する時、歌や手遊びを工夫する。鈴を子どもの耳の側で鳴らした事に教員から指導があり気がついた。

表8 第3グループのまとめ

1	<u>学生からみた子どもの状況</u> ：人見知りもあるが、集中し踊り楽しみ活動した。活動に自立心が見られた。
2	<u>学生が感じた保育者の動きやサポート</u> ：活動や遊び等でも子どもの自立を促す。声掛けし、適切な援助をしていた。
3	<u>工夫したところ</u> ：活動前に集中力を促す手遊びで導入・開始する。トンネルを作りこどもが楽しめる工夫ができた。
4	<u>環境</u> ：他の講義で作成したカプラの作品の処理で時間がかかり、環境設定に手間取った。2回目と同じ環境設定にした。
5	<u>活動</u> ：進行を把握し円滑にできた。アブラハムの子は2回繰り返したが、集中して活動、「まだ帰りたくない」という子どもがいた。リーダーが中心で活動をまとめ、判りやすい指示だった。声掛けは、子どもの目線に合わせてできた。
6	<u>学び</u> ：朝の準備、環境設定、活動の練習や準備を積極的な関わりに連動することが必要である。
7	<u>課題・対応</u> ：準備や練習はできていたが、消極的な対応となった。落ちている葉、草に気が付かなかった。名札をつけていない学生がいた。後片付けなどは、全員で実施が望ましい。 <u>課題・プログラム</u> ：練習の連絡が取れず、全員集まることがなかなかできなかった。準備、練習の必要性。アブラハムの子は1回目と2回目の歌詞と活動に変化をつける。子どもが知らない音楽をどのように実践するか。

表9 第4グループのまとめ

1	<u>学生からみた子どもの状況</u> ：自由遊びでは、子どもがのびのび遊んでいた。参加が難しいこどもは少しずつ参加できた。見送りで子どもから積極的に学生と手をつなぐ行動がみられた。
2	<u>学生が感じた保育士の動きやサポート</u> ：子ども達の意欲をひきだすようにサポートしていた。
3	<u>工夫したところ</u> ：活動に子ども達が参加しやすいように小道具を作成した。
4	<u>環境</u> ：2、3回目と同じ環境設定と現状復帰を行った。
5	<u>活動</u> ：グループの人数が少なく、アイデアや協力体制ができないのではと考えていたが、意見のまとまりが良く役割分担もできた。1回目の「バスにのって」を身体活動で行いのびのび楽しく活動した。終了後、子ども達が生活発表会で行う、「カレーライス」を見せてくれた。手遊びから身体活動、動物の国の進行、活動の連携や全体の配慮はできた。

6	学び：参加が難しい場合は、同じ活動ができなくても参加のきっかけなど配慮する。動物名の質問に「カバ」「ライオン」「きりん」など多くの答えがあった。子どもの表現を促す活動を実践する事で成長が把握できる。
7	課題・対応：活動の輪の中に入らず保育者と一緒にいた子どもが、切符をきっかけに活動に参加した。子どもの活動や表現を理解し対応を行う。 課題・プログラム：活動が時間より早く終了した為、時間配分と子どもの様子を見ながら臨機応変の対応が必要である。小道具の動物の耳が取れやすく改善が必要である。

表10 グループ全体のまとめ

8	保育での音楽活動について：乳児から母親の子守歌を聞く、幼児期では様々な手遊びや音楽に合わせて身体を動かす楽しさを体験する。音楽は身近なものであり、子どもの成長、表現、感性・感情を豊かにする大切なものである。子どもがどのような気持ちで歌うのか、楽器への興味を大切にして活動を進める。保育での音楽活動は教育的であり、次の成長に入る為に行う。音楽をどのように実践するのかを考え活用する。実習で親子バス演奏に向けてバスごっこを歌唱、リズム運動で経験した。子どもに伝える、集中を促す、言葉以外で気持ちを動かす方法である。音楽活動は幼児期から音楽表現、音楽活動の仕方によってリズム感などを養う。音楽を通して自然に体が動く、元気がでる、対象者の楽器演奏や歌唱で得られる効果などを考え、対象者の状況・様態を把握した上で要求されることを理解しプログラムを構成することが、必要である。対象者のニーズを把握し対象者に関わる、子どもの成長、表現力、創造力を養う。活動の目的を持ち、子ども達が楽しめるように行う。
9	音楽療法での音楽活動について：設定保育で音楽療法を導入に取り入れることでさらに集中力などを高める事ができるのではないかと。生活習慣や集団行動を身につける時に音や音楽を活用できる。無理に参加を促さず子どもの気持ちに寄り添い、一人ひとりの表現を大切にする活動。対象、年齢、活動目的を考えプログラムを構成することが大切である。楽しみ、リラックスさせる。音楽を通して対象者とコミュニケーションが深まる。障がい児へ配慮をしながら活動を促す事ができる。表情や声掛け、保育実技室の環境設定も活動に必要なものである。子どもから大人まで幅広く行う活動で、対象者の楽器演奏や歌唱で得られる効果などを考え、対象者の状況・様態を把握した上で要求されることを理解しプログラムを構成する事が大切である。音楽を通して自己表現、人間関係や社会性を促がす。音楽を通して人間関係を築くことや社会性・心の成長を促すことを大切にしている。子どもの心に働きかける事やリラックス、活動の意識づけの為に音楽が大切であると感じた。人には落ち着く音や音楽、音色、声質があり、これらが心に作用すると感じた。心の緊張を緩和しリラックスを促して楽しい気持ちにする事ができる。癒されるなど心と身体に効果や影響を与え、さらに聴き方によって音の捉え方も変化する。

## 1. アンケートの分析

- ①学生からみた子どもの状況：新たな環境に不安や緊張を子ども達は感じており、保育士から離れず、泣き出す状況が見られたが、回を重ねると活動に集中し、好きな遊びを積極的に楽しむ姿や見送りで子どもから積極的に学生と手をつなぐ様子があった。場に慣れる事で子どもの自然な動きを促し安心して活動に参加するようになった。その為にも活動前の自由遊びの大切さに気づく事ができた。
- ②学生が感じた保育士の動きやサポート：保育士の関わりは、子どもが学生に関わりやすいよう配慮があり、子どもの動きや次の活動を予測して行動し、子どもと学生に声掛けがあった。遊びの中で子どもの名前を呼び、子どもの関わりを学生に気づかせる事や子どもの安全には常に配慮していた。1回目では保育士の姿、行動を学生は捉えられなかった。活動を経験して日常での場所を異にする活動では保育士の援助が大きな役割をする事、又保育士の何気ない関わりの重要性について気づくようになった。
- ③工夫したところ：活動の配慮として演奏しやすい楽器の選択、小道具の作成を行った。活動のための工夫も必要であるが、自由遊びで名前を呼ぶ、笑顔でコミュニケーションをとるな



ど、子ども達が安心感、信頼感の中で対応できる工夫が必要である。

- ④環境：初回の自由遊びのコーナーを教室の左右に分けた設定では、保育者から離れず、保育者がある限られた場での遊びとなった。2回目から教室の左側にまとめる配置にすると積極的に遊びようになった。一箇所にまとめる事は、不安を解消し、安心して遊ぶ事ができ、次の音楽活動へ円滑に移行することができた。
- ⑤活動：自由遊びを通して子ども達とふれ合いコミュニケーションをとることで活動に集中する様子が見られ回を重ねる毎に笑顔で声かけを行い、安心感や信頼を得られるように活動した。「線路はつづくよどこまでも」、「アブラハムの子」の身体活動は、集中して、笑顔で楽しく身体を動かしていた。リーダーの指示に集中し、歌や手遊び、楽器活動を模倣していた事は、子どもの発達段階に即し共感、達成感を得る事ができ次回活動の工夫につながった。

## V 考 察

能動的音楽療法実践を通して、保育者養成における音楽療法の意義と課題を考察する。前期、後期の音楽療法の講義・演習としての学びを音楽活動として学生が計画、実践する事は、体験の実感があり、学びをより確かなものとする為に重要なことである。

アンケートの「学び」から、0歳、1歳、2歳児の成長や発達に併せ学生一人一人の対応が参加意欲を促す事を経験した。活動全てを援助、支援するのではなく子どもの自立心を大切に表現や意欲を引き出す事、見守る事が必要であり、保育者の関わりや声かけからも学生は実感している。活動に参加しない子どもの配慮として先ず、保育者が子どもの心に寄り添うことは大切な事であるが、歌や音楽の共感を得る事や楽器を鳴らす、身体活動など音楽を通して触れ合う、コミュニケーションを図る事で参加を促す可能性がある。自由遊びの環境設定は、子どもが遊びながら、目線の先に保育者がいる、保育者は子ども達全員が視野に入り、不安感を解消し、安心して次の活動に移行することができる。活動中に草や葉、ヘアピンが教室内に落ちていたが、気づく者がいなかった。幼児の場合、誤って口に入れてしまう危険もあり、衛生面と共に周囲に気を配ることも環境の配慮として大切である。プログラムでは、子どもの発達に配慮した計画であったが、年齢だけでなく月齢も考慮した準備と対応が必要であり、さらに全員が役割を把握した上で連携、協力、協働が考えられる。楽器活動、身体活動は、言葉だけでなく音・音楽を通して心や身体の実感が可能であり、子ども達にとって楽しみや自信、満足感を高める。能動的音楽療法の実践を通して、子どもの成長・発達を理解した上で状況に合わせ、プログラムを計画し、夫々の活動を連動して目的を達成していくものと学生は体験から実感を持って捉えることができた。さらに、音楽を楽しむだけでなく、リラックス感を促す事や社会性、人間関係にも視点をおき活動を捉えている。

## VI ま と め

音楽は楽器や身体を通し創造的な自己表現から生理面、社会性を促すこと、聴取による心理面への作用など様々な活用と影響がある。幼児は言語表現よりも早く音声と身体を使いコミュニケーションを試み人間関係を構築する。音と感情と行動に関する経験を探求することが音楽療法である<sup>4)</sup>。音楽活動は、保育者としての重要な視点を育てる意義のある取り組みである。定期的に子どもと実際にふれ合い、自分で計画、実践と検証することは確実に保育者として力をつけていくと考える。しかし、同時に学生は子どもの成長と発達を多角的に見る力、理解する力、協働の場の積み重ねが根底に必要とされる。音楽療法の理論と実際の学びと共に以上のような力をどのような場で育てていくのか今後の大きな課題である。

## 謝 辞

本稿執筆にあたり学校法人北海道浅井学園 認定こども園大麻幼稚園まんまる保育園園長 飯沼美智子先生から活動のご理解を頂きましたこと、まんまる保育園園長 矢内洋子先生はじめ活動にご協力頂きました保育園の皆様に深謝申し上げます。北翔大学・短期大学部非常勤講師 藤井由美子教授からご助言、ご指導いただきましたことに深謝申し上げます。

## 引 用 文 献

- 1) 青池美紀・他 (2012) 「こども学科新体制の一考察－新体制の導入および保育養成課程の変更－」, 北翔大学短期大学部研究紀要 第50号, pp17-24.
- 2) 澤田悦子 (2014) 「科目「こどもと音楽」を通した保育者養成－童謡の歌唱からイメージした絵本を作成する試み－」, 北翔大学短期大学部研究紀要 第52号, pp59-68.
- 3) 村井靖児 (2009) 「音楽療法の基礎」音楽之友社, p1.
- 4) マーガレット・ヒール・他 (2000) 「精神保健および教育分野における音楽療法」, 音楽之友社, p7.

## 参 考 文 献

- 1) 谷村宏子 (2012) 「音楽療法の視点に立った保育支援の試み」, 関西学院大学出版会.
- 2) 松井紀和 (2004) 「音楽療法家のための音楽療法の手引き」, 牧野出版